

郷土室だより

第六十四回東京を語る会

私の見た昭和の日本橋・京橋の移り変り(二)

講師 川崎 房五郎 氏

はじめに

昭和のはじめ頃、大不況の中で日本の大陸進出という大きな事件が起りました。

しかし、東京、いや日本橋京橋あたりの街の姿は、むしろ不況から脱却したような気配に見え、実に活気あふれる街で、すばらしくなっていた事をのべたのですが、右と左の対立もはげしく、いろいろな事件が、東京の市民をおどろかせていったといえます。

もちろん、犬養首相が首相官邸で青年將校に襲撃され死去するという大事件があったとは云え、しばらく東京は戦争の空気が感じていても平穩を保っていました。それが昭和七年の五月十五日のことで、五・一五事件などと呼んでいたのです。それがその七月にヒットラーがひきいるナチスがドイツの第一党になってから世界状況が急速にといつてよいほど違って来て、東京に住む私達にも、ヨーロッパの状況がひしひしと感ぜられるようになって来ました。

そして、右旋回へと日本が全体的に歩み出して行くようになっていったわけです。

様々な事件が世界におき、日本においても三国同盟へと進んでいったのでした。

日本でも青年將校の抬頭といった問題を強く感じる人々が多くなり、東京でも、それを市民が強く感じる時代になっていったのでした。

昭和十一年の二・二六事件

日本橋や銀座と直接関係ありませんが、ぜひ一言しておきたいのは昭和十一年の二・二六事件のことで、昭和十一年二月二十六日、大雪の降った日に起った事件です。

私は京橋図書館の三階にあった市史編纂室には当日行かず、朝から大雪の降った上野へ出かけ、帝国図書館で旧幕府の引継書を写本する事に夢中になって取りくんできました。ところが突然館内放送がありました。役所へ至急戻れということを私の名を呼んで伝えてくれました。こんな大雪に何だろりと有楽町へ行き、雪の中を京橋図書館に戻った訳です。途中別にどうということもなく戻ったのですが、役所へ着くとすぐ「大変な事が起った。軍隊が決起して大騒ぎらしい。日比谷から向うへは行かれ

ないようだ」という話で、私もびっくりして皆さんで話をしていると、昼すぎに市役所から連絡の人が来て、いろいろ情報を知らせた上「日比谷までは歩いていっても大丈夫だ、剣付鉄砲の兵隊が立っているが、日比谷交差点までは行ける」というので、皆でいってみようというので、ワーツと行っただけです。日比谷の交差点の向う側には鉄条網が張ってあって、銃をかまえた兵隊達がいるので、それ以上進めません。大勢の市民が来ていましたが、別によくわからないま、引きあげていくので、私達もそのまま、京橋の市史編纂室へ引き返して来ました。勿論銀座四丁目のあたりの商店は開いていて、人通りは雪の中でもかなりありました。私達は京橋図書館に戻って編纂さん室の先生方と話をしたりして帰宅したわけです。

しかし一般市民が大騒ぎをしたのはむしろその翌日二十七日のことでした。朝のラジオの放送はこの事件のことをつけた後、「皆さん万一弾が飛んでくるといけませんから家から出ないように、何かあったら壁にくっついてるように」といった放送で、これは私達もびっくりしました。随分度々放送で「兵に告ぐ」などがくりかえされ、午后になるとだいぶ大丈夫らしくなって私も電車が動いているので、京橋図書館の編纂さん室まで出て来ましたが、本当に一時はどうなるのかと大変心配したものでした。

事件は鎮圧されて無事だったものの、そ

れからは日本の国全体が右の方へ傾いていく傾向を強めていくことになったと云えます。

しかし当日私が銀座などを歩いた限りでは、銀座などはこの事件でも、別にどうということもなく平常と同じだったといえます。

私はいろいろ仕事のこともあって、その後も随分日本橋や京橋の表通りや八丁堀のすざらん通りのあたり歩いたのですが、別にどうという変化もあまりなく、今迄通りの賑いで、八丁堀など商店街はすばらしく賑かでした。もっとも軍関係の物資の輸送などの関係もあつたのかも知れません。

戦時体制と日本橋京橋

「戦争中の繁榮」。こんな言葉が、日本橋や銀座、いや八丁堀や人形町の町々にも使つていいほどの賑やかさは昭和十五年ごろまではまだ続いていたといえるのではないのでしょうか。それが、経済方面での物資の統制のため、そのんびりなどしていられなくなつた。それが、大体昭和十五年を境にして、大きく日本橋や京橋一带の東京の商店街の姿をかえてゆかざるを得なくなつて来たといえます。

日本橋や銀座の話をしるについても、十五年、十六年となると、東京はもう

全く戦時体制に組み込まれていき、戦時色が濃くなっていきましたが、まだまだ市中は多少のゆとりをもつていたといえます。

昭和十四年九月にはヒットラーのポーランドへの侵入という世界戦争がはじまり、興亜奉公日というのが出来て、その日だけは酒を売らず、ネオンは全部消すということなどで、商店街や盛り場などもその日だけ自粛するといった状態で、銀座の夜の世界など特に暗くなりました。しかし一日だけのことで、まだまだ毎日、日本橋の通りだつて銀座の通りだつて賑やかだつたのです。

しかし十五年になると津田先生の「神代史の研究」なども発禁になり、右への旋回は次第に強くなり、斉藤隆夫代議士の衆議院での戦争政策批判が新聞ぶつこ抜きで出ると、これが大問題になり、三月には衆議院が斉藤さんの除名を可決するといった事態で、私達も容易でないことをひしひしと感じていったのです。

東京市民に一番直接の影響を与えたのは、四月のみそ・米・マッチ・砂糖など十品目の切符制になつたことでした。もうやはりはあつて買う人など裏からの買いあさりは大変なものでしたが、これも品物のあるうちだけ、あとは全く切符制でやつていくより仕方が

なかつたのです。十月には砂糖・マッチの配給統制が公布された程で、九月「日・独・伊三国同盟」が調印され、大政翼賛会が発会式を十月やつたのですから、どんなに日本が戦時体制になつていきつゝあつたか、おわかり下さると思います。

しかし、そうはいつても、十五年の十一月十日から五日間、紀元二千六百年の祝賀行事が行なわれ、戦争中であるのを忘れるほど東京市中は人出があり、銀座はもとより日本橋や人形町なども賑やかだつたのです。「だつたのです」というのは、私は当日人形町には行かなかつたのですが、皆さんの話で随分人が出て賑やかだつたという話でした。

まあこの位で、実際は「物不足の東京」に次第になつて行きましたが、まだ十五年ごろは淋しいという感じは日本橋や銀座にはなかつたといえます。

こういつては申し訳ないのですが、十六年の四月に小学校が国民学校と名稱が代つても、東京ではまだまだ割合戦争を直接一般市民はハダで感じることは少なかつたのです。しかし、すぐ四月六日米穀配給通帳制が実施され、独身者などに外食券制度が実施されること発表されると市中は大騒ぎになつたことは事実です。

あとで、この頃の銀座の話をしませうが、何といつても新聞・ラジオでゾルゲ事件による尾崎秀実の検挙などの報道が、市民をギョッとさせ、大きなショックを市民に与えました。

十六年の十月のことでしたが、同時に十月東條内閣が近衛内閣に代つたことは、当時の日米のいろいろな感情からみても、容易でないと思はれたことはたしかです。そして十二月八日真珠灣攻撃から遂に太平洋戦争へと突入したわけです。

それでも、当初の戦勝やつづいてのマレー沖海戦の勝利など、東京は大変だ大変だと云いながらも毎日パンザイ・パンザイと旗行列をする列がつづく光景が見られたほどで、すでに七月からはじまつていた「隣組の常会」などが、これからは度々聞くようになり、市中ではどこでも、町会と隣組というのが、生活と密着して毎日すこしていく上で重要なものになっていきました。

こうした東京の次第に「統制」という法律にしばられて、売る商品も少なくなり、商店が店をあけて營業をしていくことがむずかしくなつていった状態の話を致しました。しかしこの十六年十二月八日太平洋戦争がはじまつた頃からでも、まだ空襲などにはおびえずに、結構東京の街々は賑やかであつ

た話を、日本橋で十八年四月日本橋十軒店の雑市の武者人形の素晴らしい人形市の話、銀座では「鯨のトンカツ」を食べた話などで当時の姿をしのんでみましょう。

戦時生活下の白米

「統制経済から切符制」へ、これは私のような老人が話さなくてはならないことですが、市民が一番生活で大変だったことは米は配給がきちっと制限されるし、ヤミの買出しはむしろ戦争がきびしくなるほど、取締りもきびしくなって、不心得な人々が警察へといった記事が載る時代、何とか米を少しでも配給以外に手に入れて子供に食べさせてやりたいというのが人情です。私も女房もその点ではどんなに苦しかったか知れません。国電へ乗るのにもゲートルを巻いて出勤するようになって来た時代です。電車にのって座っていると、向う側に座っている田舎から出て来たらしい人が、皆さんの見ている席で、やおらカバンの中から新聞包を出し、拡げると竹の皮の中から握り飯の真っ白い米のお握りを出しむしやむしや食べ出したのです。隣の人達どころか、こちら側に座っている人達までが、皆一斉にそれを見つめ、中にはわざわざ寄って来て、うらやま

しそりに眺める。これではさすがにその人も握り飯を食べるわけに行きません。急いでカバンへしまいいむといた、こういう光景、今の皆さん方には到底考えられないことでしょうか、それほど私達は白米にあこがれていたのです。お米の一粒二粒まで当時どんなに貴重なものであったか、東京市中に配給という制限のもとでの戦時中の生活、本当に大変なものだったことを、ぜひ知っていただきたいと思えます。こうした話から、日本橋や京橋の町々の姿をながめると、十四年ごろまでのすばらしさ、ことに銀座の裏通り、横町などの夜の世界の賑やかさとうって変って、次第次第に物資不足が市民生活にのしかか、って来て、銀座でさえ店をしめて休業する所が出るようになっていったのです。



金属供出（銀座通り）

鯨のカツの話

私は昭和十五年に結婚して、まだまだ戦争といっても、直接身近にせまった時代ではないものですから、女房を銀座につれていっても、まだまだ銀座にはちゃんとうまいものを食べさせてくれる家はたくさんあったので、人通りなども、それは賑やかだったので、次第に売れる物が制限され、米・みそ・砂糖・マッチなどが切符制になり、

か食べさせてくれないか」と入った訳です。「久しぶりで来たから」といったら、「残念ながら肉なんて、見せてやりたいけど、本がないんだ」というので、「女房つれて来たんだ、何か出来ないか」というと、「何かとあったって困るんだが」「そうそう鯨の肉が少しある、鯨の肉だって、うまいんですよ。カツに揚げてやったら」と女房さんが云ってくれたのです。

②マル公など明示するような時代になりました。女房と一緒に銀座へ行ったら、何か食べようと出かけたのですが、銀座の表通りなど、かなりな店が閉店、休業というお店が多く、随分商店街としての様相が違ってしまったことは、非常に淋しい気持ちでした。どこかで何か食べようと少し歩いたのですが、まだ当時は全く休業ではなく、時にやり、パツと店を開く時がある。皆がワ

「有難い、鯨の肉でも結構です。ぜひお願いします」「銀座で商売していて、鯨でトンカツなんてはずかしいが、どうしようもない、せつかく来たんだ、食べていってくれ」というので、それは本当に驚くような大きな鯨のカツを私達夫婦に出してくれました。そのうまいの何のつて、本当にそのとき久しぶりで銀座らしいカツ、それも鯨の肉のカツレッツを食べたのです。全く当時御馳走なんかには飢えていた時代です。女房と一緒におじぎをして食べて帰って来た記憶がございます。値段なんて本当に二人で食べてもたいしたことなかったのですから、有難かった忘れられない思い出です。

昭和十八年十軒店の雑市

店があいっていました。まあ私達仲間がいきつけの家だったものですから「何

雑市といっても武者人形の市の日本橋十軒店の賑い話をします。恐らく

戦前最後の賑いをみせた市といっていると思います。

私の長男が生れたのは昭和十七年の七月でしたので、昭和十八年になって三月のお節供がすぎると、何とか初節供に兜か、人形の一つ位は買ってやらなくてはどう考えから、日本橋の十軒店の武者人形の市に買って買うことにして出かけました。

親類から祝いの人形だの鯉のぼりなどを戴きましたので、兜のいいのを買おうと思ったのです。四月の二十日すぎ頃だったと思います。当時は十軒店と尾張町の二ヶ所に商人の店は出ましたが、その景氣のよさや人出などは十軒店の方がはるかに賑やかだったので文句なく十軒店へ出かけました。

神田の駅をおりて本石町の交叉点をすぎるともう人通りはものすごく、雑沓を極めてるのが、すぐわかります。

今は表通りに玉貞さんが一軒人形の店を出しているきりですが、昔は表通りに人形店がかなりあったという話です。

私が本石町の交叉点の十文字を越えると表通りにはあまり市の店はなく、裏通りにはびっしり店が出ていて、本当に狭い通りに「押しあいへしあい」の人通り、何とか安く買おうという人々が、どこから集って来たのかと思うほどの人出で、びっくり仰天しました。

何しろ買うのが容易でないほどの人出、どこに戦争があるんだと云わんばかりに五月人形の店が、裏通りを占領してずーと並んでいて、歩くのも容易でない程の混雑ぶりです。

特にこゝに集って買いに来る人達、全部が全部江戸っ子とは云えないでしょうが、面白いことに正札なんかで買う人はいませんから、正札なんかついていません。幾らと聞くと、幾ら幾らという。「いや高い、そんな値段じゃとても駄目だぞ、俺は本当に買いに来たんだ。もつとずつとまける」などと云って値切ることが楽しみで来たような人ばかり、「そんなら向うへいって買うからい、や」なんていうと、「ちよつと待ってくれ、おいこれ幾ら迄になる」と仲間が声をかけると、「せい一杯まけていくら迄だ」と向うの人が符牒でどなりまします。「よしそんならいくらいくらにしておこう、それ以上はまけられねー」なんて云う、「まあいーや買っていこう」などと商談が成立します。本当に買う方も値切るために来たかと思うほどの人ばかり。はじめに云われた値段で買う人なんか一人もおりません。仲間同志の値段を符牒でどなりあうのは、素人の人にわからない独特の符牒がつくられていて、人形の商売の仲間だけ大きな声でどなりまします。

一般の人にわからないように出来ていたんだそうです。

本来符牒というのは各自の店々で独自に使うもので、他店にもわからない暗号みたいなものなのですが、多くの

人々が店を出すのですから、店を出す人々に統一された符牒が必要だったため、雑沓の人のたち専用の符牒が出来て、山田徳兵衛さんという人形で有名な方の店が昔「吉野屋」といったので、

「ヨシノヤフクキタルヨ」とはじめのヨと終りのヨを小のヨ、大のヨなどといい、一から十まで「吉野屋福来るよ」で統一したのだといわれています。

まあ山田さんの店が人形関係の人達の總世話役みたいな形に東京で何かと世話をするので、山田さんの家の符牒をつかったのだという説もあります。一のフと十のフをどう云ったのかよくわかりません。しかし皆がこの符牒で呼び合っても平気で罷り通っていた十軒店の雑沓、本当に面白いことと云えましょう。

しかし、この昭和十八年の武者人形を私が買いにいった時のものすごい雑沓、その中でもまれもまれしながらやっとなりあうのは、素人の人にわからない独特の符牒がつくられていて、人形の商売の仲間だけ大きな声でどなりまします。

「まからねー」とやっている姿、私にとつて、これが雑沓の賑いの最後だったという感じが、今も消えずに残っています。

ついでに尾張町の雑沓のことを少し申しそえます。十八年でなく、少し前のことだったと思いますが、今の銀座四丁目鳩居堂さんの側、西側に雑沓らしいものがずつと並びました。十軒ぐらいいしか出てなかったと思いますが、表通りの四丁目の西側、それも鳩居堂さんから新橋の方へ、少し並んで店が出ただけで、とても「押しあいへしあい」するほどの人出ではなかったのです。江戸時代は数寄屋櫓がな、めにかゝっていて、出てくる人々は今の一番館のあたりから真直に尾張町の角へ出て、今の松坂屋とギンザ・ファイブの間の通り、あれが尾張町の通りでしたから、松坂屋のところから十文字の交叉点でした。えびす屋・亀屋・布袋屋などがあの辺にあつた江戸の頃はさぞ尾張町の雑沓も賑やかだったことでしょうが、私のみた昭和の尾張町の雑沓なんてものは、戦時中でしたから到底十軒店のような賑やかさはなかったのです。

それにしても、まだ空襲のはじまらない昭和十八年四月の十軒店の雑沓、丁度若い人々が戦地へとどんどん召集

令状の来た頃です。子供達の幸せを願って、武者人形でも飾ろうという市民の熱い氣持が、こんなにも人が集ってくる賑わいを見せたのかと感無量でございます。

国民酒場と西本願寺境内の切符場

戦時中の東京の市民生活で忘れてならないものに「国民酒場」があります。だんだん物資の統制がきびしくなると、酒なども勝手にめなくなつたのは当然のなりゆきでしたが、東京には有難いことに「国民酒場」というものが各所のビアホールなどを利用して切符、酒のいわば配給券といったものを市民のために特定の場所で配り、その日その券を貰った人だけが、その券を持って市中にある特定の国民酒場にくくと、酒は一合位だったと思いますが私は銀座のビヤホールで飲みたいために、ビールを選びました。

築地の西本願寺さんの境内が何もなく、実に広い感じのグラウンドみたいな感じでした。そこに特定の日に各ビヤホール別に旗を持った人が午後の二時頃やって来て、境内の何か処かに別れて旗を持って立ちます。それを待っていた人達が、各自目ざした旗をもった人の処へワッと並びます。そこですぐ延々と行列が出来ます。それは実に整

然と行なわれるのです。三時になると一せいにビールの券を一人に一枚ずつ配りはじめます。行列に並んでいた人たちはビールの券をもらうと、すぐ走り出し、ものすごい勢いで、他の行列でも切符を貰えそうなのを突差に判断すると、そのシリに走って行ってまた並びます。うまくいくとビール配給券二枚入手出来ることになりました。本

当にそれはすごいスピードで走って行って並び、何とかもう一枚ビール配給券を得ようとするとその努力というものは本当にすごいものでした。役所に戻って、少し帰りをゆっくりし、銀座の表通り、ことに四丁目の角のビヤホールなどについて券を出すと、ジョッキ一杯分が出ます。私達は仲間ですごく話しながらゆっくり飲んで、とても大杯一杯で、二杯貰える方が少なかつたのですが、おかずもろくにないのに喜んで飲んで家に帰って来たものでした。しかし次第にこうした光景も、だんだん困難になり、多くの人々が水筒を持って来て、それに入れて帰って帰る人が多くなつて、国民酒場といつても飲んでいく人が少く、貰って、持参した器に入れるとすぐ帰るという実に淋しい光景で、こんな時代がそれでも空襲がはじまるかなり前の事でしたが、銀座にあったことを知っていただ

きたいと思えます。何しろビール券はしさに西本願寺境内で行列したこと、忘れることの出来ない思い出でした。

雑炊食堂の話

戦後の方々に雑炊食堂の話をして、何の事かわからないでしょうが、何しろ食料統制、配給制度という戦時下のきびしい米の少ない生活で耐えていかなくならぬ東京市民にとって、この雑炊食堂ほど有難いものはありませんでした。各町ごとにはありませんでしたが、東京では五六町に一か所ぐらい雑炊食堂が出来たといえます。そこで晝飯が食べることが出来るのですから、配給外に食べられると云うので市民に大歓迎されたのです。日本橋や銀座、さすがに表通りにはなくても、ちよつと横町なんかにはちゃんと雑炊食堂が出来て、どの位市民を喜ばしたか知れません。

しかしこの雑炊、店によっては案外しつかりしていてズルズルではない所もあり、味はいいがズルズルで、ちぎりに腹がへるといった所と、いろいろでした。そのため、井に一杯の雑炊が出ると、真中に箸を立てます。割合に水気の少ない雑炊なら暫く箸は立っています。すぐ倒れて井に横になるような店もありました。「あすこの店のは箸が

立つぞ」とか、「あすこのはズルズルだぞ」と大体食べ歩きすればわかります。なるべく箸の立つような店へ行って食べるようになります。人情です。そうした店はもう行列が出来るほどで、一杯しか食べられません。「おい、どこかへ行ってもう一杯たべよう」などとズルズルでも味のよい店を、かなり遠くても食べに行つたものでした。

銀座や日本橋でも、もうかなり店をしめる所もあつて少し淋しくなつて来た当時、こうしたことで、ただ歩いてみた時があつたのです。私は比較的築地などでよく食べた時がありますが、十九年になると市史編纂室が四谷若葉町に移転したため、四谷の通りと信濃町などで雑炊を食べるようになっていきました。

何にしても空襲がはじまるようになってからでも、雑炊食堂が各町々の焼けない処にはあつたことはぜひ知っていただきたいことです。どの位雑炊食堂があることが、毎日の生活の助けになったか、本当に今思えば有難いことだったといえます。

空襲の話

東京が戦争によって空襲をうけるということは既にヨーロッパの状況から見て誰でも考える事でしたが、実際に

空襲をうけるまでは、比較的のんびりした氣持でいた人が多かったことは止むを得ない事でした。

昭和十七年の四月十八日晝間の事、ドウリットル指揮によるノースアメリカンB25が東京を初空襲したのですが、被害は早稲田鶴巻町とか葛飾の水元附近に被害が出た程度で、中央区(當時は日本橋区・京橋区)の被害なんか殆どありませんでした。

そうしたことも、市民をそんなに恐怖のどん底におとし入れられるということとはなかったと云えます。

私は空襲当日の晝、偶然にも銀座に出ている、七・八丁目あたりで空襲警報が発せられてびっくりして、民芸品を売る「たくみ」の店に入り、皆さんと色々話をしたのですが、銀座の人もはじめての空襲警報で驚ろいたことは事実ですが、別にどうと云うこともなく終り、銀座の街はわいわい云い乍ら歩いていく人はあっても、あとは平常とちっとも変わらない状況だったと云えます。

しかし十八年になると、もう日本の状態はただならぬ氣配になり、全く臨戦態勢へと進んでいったのです。勿論、葛飾区内や早稲田の鶴巻街あたりに少し被害があったのですが、それだけで、市民生活は、まだ少しゆと

りがあったのです。

本格的空襲へ

私は今の中央区、戦時中の日本橋区京橋区の私の見た姿を語るといって話をお話するのに、中央区に住んでいないということ、これは全く申し訳ない事と思います。それは隣組の常会というものが、実に頻々と開かれて、街のこと、配給のこと、ほとんど生活に

関する一切のことは隣組の常会で伝えられる。そうしたことは住んでいる人が語るのが一番よいので、十八年からはじまった学童疎開のことなど銀座や日本橋の小学校の生徒たち大部分は埼玉県へ疎開し、次第次第に街が淋しくなつて行き、店を閉ぢる所がぼつりぼつりと増していくと云う姿は住んでいる人が一番身にしみて感じた事なんです。それを伝えられないことは残念です。十九年の十一月二十四日武蔵野町の中島飛行機製作所を主たる目標にして東京大空襲がはじまるのですが、それは東京市民にとって今まで考えていた恐ろしさなど到底問題でない程の恐ろしい物すごいもので、B29と聞けば市民が身ぶるいするほどの恐ろしいものでした。荏原や品川・杉並区の人々は全く震えあがったのでした。これからは私達は休む日もないほどに空襲

警報に見舞われていきましたが、十二月三日の空襲など大騒ぎでした。中央区内、日本橋地区や京橋地区は十一月二十九日から卅日朝文字通り本格的な空襲がはじまるのですが、市街ではなく浜離宮が爆弾で中の島の茶屋や附近の御茶屋が皆やられたことは、どんなに市民達を驚ろかしたことでしょうか。引きつづいた三十日の空襲で日本橋から江戸橋・茅場町などに空襲が行なわれたのです。いよいよ区内にも大きな被害が出ていったのです。

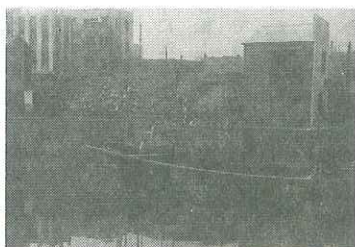
銀座が、主として大被害を出したのは、二十年になつてからで、一月二十七日のことでした。

もちろん、それまでにも日本橋区内でも、私の記憶にあるのは、十軒店一帯から室町の一帯が全部やられた十一月三十日の大空襲は表通りの焼失ですからよく覚えていきます。全く瓦礫の山の惨たる姿で私もふるえ上るほどでした。この時私には見に行きませんが、茅場町から江戸橋の一帯にかけて、すごい惨状だったそうです。

その後空襲はつづき、被害もあったのですが何と云っても二十年一月二十七日の空襲は銀座一帯に大打撃を与えたすごい空襲で、あとで見にいっただけで、勿論話でもいろいろ聞いたのですが、その焼跡の惨状は全くすさまじ



浜町河岸



三原橋附近



昭和通

いもので、ことに泰明小学校では女の先生が四人も即死したというので、いつ迄もその話でもちきりでした。これが昔の銀座かと思うほどのひどい街の姿でした。

それから人の話で恐縮ですが、二月二十五日のまっ晝間、江戸通り一帯の間屋街、横山町馬喰町一帯のすごい惨状、ここにおられる方々のうちにも戦災にあわれた方もありましようが、どこも焼野原という感じでした。

三月九日・十日の大空襲の話など全くたすごかったと申しあげるより外はありません。

私は都庁舎が焼失したり、私の同僚の四谷分室に勤務していた浅草今戸に住む歴史家の高野さんが、水死体で隅田公園に收容されるという事態が生じたため、本日に十日の日はまだ火がくすぶっている中を飛んで歩いたというほどで、全く隅田川辺一帯は死体だらけ、街はほとんどやられるといった具合で、文字通り東京がなくなるほどの被害だったといつてよいでしょう。

私が晝近くだったと思いますが、銀座四丁目の角のところにいった時の光景をはなしますが、銀座の十文字の交叉点あたり、建物はまだ残っているものが多く、銀座四丁目の角だと誰でもわかるほどでした。その今の和光側に

立って眺めていると、築地や月島方面から歌舞伎座の前を通って、反対側も同じでしたが、ぞろぞろとずっと続いて四丁目の方へ歩いてくる。その人達が、リュックを背負ったり荷物を持ちたりして歩いてこつちへ来るのですが、誰も誰もが、顔へ脱脂綿のものを張った人ばかり、かなり火傷した人もいて、その戦災にあわれた気の毒な人達が、黙々として数寄屋橋方面、有楽町方面へ歩いていく。そうした行列の姿は全く異様な姿で、私はただ見送るばかり、大勢ですからなくさめようもない気の毒な姿だったのを覚えています。

私達東京に住む、ことに下町の人々の多くは「観音様が無事なうちは東京も大丈夫」といった一つの共通な感情があったことは事実です。その浅草の観音様も、大晦日から元旦の朝にかけての空襲では五重塔がやられ、この三月九日十日の大空襲では遂に本堂も焼失して了ったのです。私などが、がっかりきた事は当然でした。

それからは四月五月と大空襲によって、皇居まで焼失した事は皆さん御承知の通りで、焼野原東京となつてしまつた訳です。

八月十五日

昭和二十年八月十五日、云うまでも

なく終戦の日です。都庁の職員いずれも、本庁舎勤務の人々ばかりでなく、私達のように離れた場所に勤務しているものも「皆都庁舎前に集つて重大発表を聞くように」という通知をうけ、いよいよ終戦と云うことで、大勢が集つて正面玄関前で、陛下のお言葉をラジオで聞いた訳です。

しばらく皆さん集つていて、いろいろ話をしていました。公然と日本がこれからどうなつていくかといった話も出ましたが、本当のことと云えば、今朝の寝ている間に頭の上をぶんぶん飛んでいったB29の大群が、一体どこを空襲したのか、熊谷が全滅したほどやられたそうだった話だ、どのグループでも持ちきりの話だったことは事実です。

都庁舎玄関前から各自が適当に戻つて興奮は一応おさまつていきました。しかし私達の気持ちといえは全く各自複雑なものがあり、当然終戦は覺悟はしていましたが、「もう空襲はないんだ」という気持ち、本日にホツとした「気持ちになつたことは否定できません。中には今朝のすごい大空襲、熊谷などが徹底的にやられたそう。この詔勅の言葉が聞ける朝焼けるなんてことは全く気の毒だといった声がかなりあつたことは今でも忘れられません。

さて終戦のラジオの放送がいろいろあつたにも拘らず、十五日の夜、暗幕をはずして堂々と電氣をつけた市民があつたかというのと、どうもそんなことはなく、つけるにはつけたが、今迄通り暗幕の中で電燈をつけたと云う方が随分いた。いや全く暗幕をはずして、堂々と電燈をつけた家はごく少なかったやうです。今考えると、すぐパッと私達が終戦の変つた姿になる心の準備が、そう出来るものではなかつたといえます。

いや十六日になつても、電氣をあかあかとつけてもいゝのか、怒られるかな、警察へつれて行かれるかも知れぬぞなどと実に様々な考えから、なかなか市民は黒い暗幕を取り払おうとはしませんでした。

本日に東京の町が明るくなつたのは、五日ぐらいたつてからだったでしょうが、二十二・三日ごろから東京の夜も暗幕をほとんどはずして明るい街が久方ぶりに戻つて来たと言ふ感じになつたと云えます。

戦後

終戦から一週間もたつと、市民の心配はやはり聯合軍が東京へ進駐して来て、東京の市民はどうなるかという問題が一番多くの市民の心配の種でした。

しかし、デパートなど焼け残った所では、終戦後、進駐軍の入ってくる前、二日間から三日間ぐらいでしたか、少し当時それまでは到底手に入らなかつた呉服や小間物を売って、市民があわてて並んで買った風景が見られたことも事実です。

そうして進駐軍が乗りこんで来ることになつたのですが、やはり市民は自分達の生活にどう影響するのかが一番心配でした。

私の知っている日本橋や銀座の旦那衆のうちには、縁故疎開もせず、東京にふみとどまつていた方々が、かなり有りました。そうした方々の何人かに私は相談されました。それは娘がいる。万一ということがある。マッカーサー元帥が聯合軍の御大としてのりこんで来るそうだが、「一般兵士がどんなことをするかわからない。何とか一時様子が分かつて落ちつくまで娘をどこかえ預けておかないでも大丈夫かしら」「どこか適当な場所を東京の近くの農村で知らないか」といった御相談が何人かに有つたことは事実です。

しかし私もどうなるのかわからず「東京は司令部がおかれる所だから、むしろ東京においた方が安心なのではないか」といった東京都庁の上層部の人の考へ方をお伝えただけでした。

こうして、聯合軍は東京へ進駐し、日比谷のお堀端の第一相互を接收し、聯合軍の司令部として、マッカーサー司令部の統治が始まりました。



日劇

これは中央区として、本当に復興を最も早くなしとげる一因となりました。銀座に進駐軍の人達のPX、日用品販売の店がおかれたことです。

進駐軍と銀座復興

進駐軍が来たらどうなるんだらうといった心配は全く杞憂にすぎず、東京、特に銀座が急に進駐軍の人達であふれる有様となり、むしろ復興回復は銀座からといった工合になっていったのでした。文字通り「復興は銀座から」と云うような言葉が戦後すばらしい東京の復興の一つの相言葉にとり入れられたのも、日比谷にあった第一相互が、マッカーサー司令部の本部として接收

され、重要な位置を占めるに至つたためでした。そして進駐軍の人々の家族たちが、いろいろの生活必要物資を買う店として、今の和光の服部時計店が接收され、更に間もなく銀座の松屋デパートが接收され、PXとして、急速に外人さん達が日比谷から真すぐに銀座へ群がり集つてくることになつたのです。軍人として来日した婦人たちもおり、アメリカさんの奥さん達もあつて、進駐軍の軍人たちと一緒に銀座にぞろぞろ集つて来て、日用品の買物をするようになっていったのです。

外国の婦人達が大量銀座に来ることになると、四丁目のあたりは、もう忽ちにして復興し出したのです。多くの日本人、いや東京に住む人々が、ワツと銀座へ出て来た。実にさまざまな品物をもつて銀座へ来て、言葉が通じなくても、そんな事は問題でなく、ただ軍人さんや御婦人方に差し出し、いくらかといつた値段をい、ながら見せるのです。帯だのいろいろの物が売られ、外人さん達も記念に買いつつた人が相当にあり、結構商売になつたようです。いや日本人の中には、「たばこ」「たばこ」といって品物とたばこを交換する人がかなり多かつたのです。交換や現金で取り引する風景が四丁目交叉点を中心にして各所で行なわれた

のが戦後間もなくの風景でした。外人さん達の「ハウ・マッチ」という言葉が多くの人々の頭に残っていることでしょう。

焼け跡の東京の町に各所に露店が出て、まずマーケットから発展がはじまつていったのですが、銀座の通りにも戦前から露店があつたものですから、露店としての銀座も復興したのですが、また一方進駐軍の軍人が多く銀座に出て来た点もあつて、一時期は靴みがきが四丁目を中心にズラリ並んで、銀座の名物のように思われた点もありました。

名物といへば銀座四丁目で忘れられないのは交通整理をするMPの姿です。台の上のつて、両手を広げたり縮めたりして交通を整理する。その手際よき、正に名物というにふさわしいもので、わざわざこれを見物にくる人々さえあつたのです。

次第に戦前をしのぐほどの建築物の華麗な市街として銀座が回復して、すばらしい銀座になり、日本橋の賑いを奪うほどの盛り場になつていったので、私は銀座の服部や松屋がPXになつたことが「復興は銀座から」の主たる原因であり、さもないければ、こんなに早く立直れなかつたのでないかと思うほど、戦後の銀座の立ち直りは素早かつ

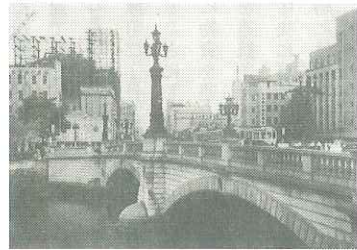
たといえましよう。

日本橋の上の高速道路

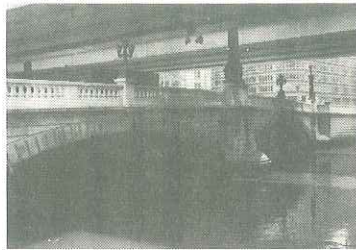
私は一番今になって残念に思うのは戦後出来た高速道路のうちの日本橋の上を通る高速道路です。実際日本橋の通りを歩いて、日本橋にかゝって歩いてみると、頭の上にかゝっている高速道路がどんなに邪魔で殺風景なものか、どなたも感じられることでしょう。

しかし三十間堀の埋立てにつづく御堀の埋めたてが灰燼処理として止むを得ずかも知れませんが、どんどんな行なわれて新しい土地が出来ていった時には、都民はそれこそ拍手して喜んだものでした。やっと焼け土のうず高くつまれていたのが片附いた。その上に日本橋の上に高速道路が出来るなんてすばらしいと一般都民（日本橋の区民ではありません）。広い意味での一般都民で日本橋あたりにやってくる人々ととって、日本橋の頭の上を高速道路が通るといった時、「すばらしい東京の復興ぶり」と誰しもが敗戦から立ち上ってここまで来たという感じをいだいたことは当然であり、すばらしい事だという感じで、体裁が悪いという人があっても、可成りの人達はむしろ東京の復興としての眼でこれを見て、橋の上のしか、るように通る高速道路を

むしろ自慢に思った人々が多かったことは事実です。



昭和30年頃 日本橋



昭和50年頃 日本橋

それが八重洲の発展が、西銀座デパートなどの発展につながって、どんどのびて日本橋近くが賑やかになってくると、一応気持ちの上でおちつき、感じ方受けとめ方に違いが出て来たと言った方がよいでしょう。多くの日本橋を通る人々が、頭の上を見あげて、どうしてこんな処に高速道路なんか作

ったんだろうか」「息がつまりそうだ」「お江戸日本橋が泣くぜ」などなど高速道路の悪口を云う人が続出している始末です。私だって、今行ってみて、橋の上から高速道路を見上げれば、全くだどこかえ持っていきたいと思えますよ。しかし当時としては止むを得ずどころか、むしろ高速道路の出来たことを喜んだ多くの人々の当時の気持ちから見れば、この高速道路のために、東京の交通がぐっとよくなり、商業的にも大きな「便利さ」をもたらしたことを思えば特別な感情もわきまします。しかし、現在どうみても出来れば日本橋の上の高速道路を少しわきの道の上に移せないか、何も「お江戸日本橋」の上をわざわざ通さなくても、よかったのではなかったか。いや何とかがどけないという気持ちがあるのは否定できません。

八重洲と箱崎エアータミナル

三十間堀は焼土を埋立てに利用する考えて、復興事業がはじまり東京の復興をさまたげているところのいわゆる灰燼と帰したあらゆる残骸を含んだ焼土を、どんどんなほうりこんで埋立地が出来たのですが、昭和通りの中央にデソとかまえて、向う側へ行くのも大変というほど小山のようにつんで延々と続いていった焼土の山をどうするかが大



埋立後の東京駅八重洲口

問題でした。都としても建設局なども大変だったのですが、とも角、どこかへ捨てるか埋立てに利用するより外はないことは明らかでした。この昭和通りにつらなる焼土の小山を取りかたづけなくては中心部市街の復興はないと云うほどの状況でした。

そこではじまったのが、東京駅前あたり一帯の旧江戸の内堀へ、この焼土を運んで埋立て、一大商業地を作ろうという計画が推進され、地下も町にする、一大商店街築造と共に東京駅出口をこの八重洲に求めるといふ夢のような計画で、千代田区とか中央区とかいう境界の問題もあつたとは云へ、何よりも東京の復興が第一、日本橋側に東京駅から丸の内側をしのぐ出口を設けて、東側の出口を立派なものにする。それには駅ビルを設けて、日本橋側を賑やかな商店街にしよう。日本橋の昔

の商店街と一とつづきにした市街をつくろうというので、御堀の埋め立てとなり、戦前よりも、はるかに素晴らしき出口が出来たのです。あれよあれよと云ってるうち、驚ろいた八重洲一帯のすばらしい発展です。

勿論、埋立による有楽町〇番地（ですが、東京駅（いう迄もなく千代田区です）の東口、俗に云う八重洲口に通じる本格的駅ビルが建ち、大丸が進出すると、埋め立てられた八重洲一帯の中央区の方が、アッと云う間に商店街になり、しかも大地下道を持った商店街が出来、地下街、地上の商店街が多くの客を集める大商店街になっていきました。



箱崎エアターミナル

戦後、もちろん人形町をひかえて、箱崎町に成田空港に通ずるエアターミナル・ステーションが出来たことは、その後の成田空港のすさまじい発

展につれて、ここを利用する人の増加率が年々高まってゆくに連れ、区内に一つの大きな空港への出発駅という形での箱崎町界隈への人の集りをさそって、今後益々独自の発展をとげていくことと思います。

勝鬨橋 かちどき橋

戦前の京橋区でどうしても語らずにはいられないものが、もう一つあります。それはもう戦争が中国で行なわれている最中の昭和十五年の六月十四日完成の開通式が行われた勝鬨橋（かちどき橋）のことです。

明治二十年から二十五年にかけて月島の埋立築造がはじまったのですが、二十五年に第一号地が完成したのです。その後次第に発展し、すばらしい工業地帯になりました。しかし相生橋だけの交通ではとても不便なので、橋をかけることになり震災後の大発展により、小田原町二丁目から月島二丁目に橋をかけることにしたのですが、石川島、月島に物資を運ぶためには、橋を開いて船を通航させる必要があります。そのため、中央に可動部を設けて、大船の通航の時には橋をあげて、船を通すという、すばらしい「はね橋」形式の橋が出来上がったのです。かちどきの渡しの場合に完成したため、かちどき橋とつ

けられたのです。

開通式は十五年の六月十四日行なわれ、三千人以上の人々が集った盛大なものでしたが、当日「白衣の勇士」たちが船で開いた橋を通りぬける姿が、実に印象的だった記憶があります。

時間によって橋があがり、船が通るので、多くの人が、時間集まり、「上がった上った」と大騒ぎで、全く東京の一名物になって、どんなに市民たちに興味をもたれたことか、本当にすばらしい人気でした。

おわりに

私は昭和の日本橋・京橋を語る上で、重要なもう一つをつけ加えねばならないようです。それは地下鉄の開通です。もちろん昭和二年の十二月上野浅草間にはじめて地下鉄が開通して、東京市民に大歓迎され、「乗った、乗った」と大騒ぎで、もう上野一帯でも、浅草の方も大変な騒ぎだったのです。

しかし日本橋や京橋一帯、町としては別にどうということもなく、何にも影響はありませんでした。

それが地下鉄の工事が次第に延長されて昭和五年一月には万世橋まで開通、更に七年四月には三越までくるとなると区内も変わってくるのです。日本橋が急に活気づいたことはたしかです。十

二月には京橋まで、九年になると、三月には遂に銀座まで開通となると、銀座一帯は不況をふきとばせとばかり活況をみせたのです。そして六月には銀座新橋間が遂に開通するに至ったのです。

どんなに日本橋や京橋地区の人々が喜んだことでしょうか。商店の方々などは「このうれしさは任んでみないと分からないだろう」などという方もありました。震災後の東京の復興は郊外の都市化をうながし、郊外へと移り住んで、東京市中へ通勤という形をとる生活が市民と東京の旧十五区との間に根をおろし、ついに昭和七年十月には郡部といわれた一帯を東京市にくり入れ、二十区とするという「大東京市」が昭和七年十月一日に成立したのです。

もう一つ、築島百年といわれる今年、晴海の港湾都市としてのすばらしい発展が今を盛りと拡がりつつあることです。こうした区内の変貌をよそに、止むなく区内を去っていった方もありますが、今とよほど違った更に一層近代化した中央区の発展が私には信じられないようになって来た次第です。

長い間お聞き下さって有難うございました。

（一九九一・九・二十八講演）